北の縄文、釧路の縄文。

澤田　恭平*

2021（令和３）年に「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコ世界遺産に登録され、いまや全道的に「縄文」が注目されています。釧路市立博物館でも2022（令和４）年に、道東で過去最大規模となる「北の縄文展」を開催いたしました。このような縄文ブームの中、過去の考古展示を振り返り、釧路の縄文について紹介したいと思います。

北の縄文展

2022（令和４）年９月から11月末にかけて釧路市立博物館では、北海道環境生活部の縄文世界遺産推進室と共催し「北の縄文展2022in釧路」を開催いたしました。推進室の担当者を筆頭に進められた展示の設営準備では、資料を借用した自治体の考古担当者も駆けつけ、まさに道東を中心とした道内各地から人と資料が集った展示となりました。多国籍軍の装いを呈したこの展示は、まるで「考古学担当者のまつり」のようだな、と感動した記憶があります。来場者も熱心な方が多く、釧路会場撤収日に行ったフロアトークの参加者が、翌日の網走会場開催の際にもお越しになられていた。という光景もみることができました。

北の縄文展2022in釧路　展示設営準備のようす

2023（令和５）年度は「北の縄文展2023in北斗市」として道南の北斗市で同様の主旨の展示が開催されました。釧路は、縄文晩期に道南・東北地方からの搬入品である亀ヶ岡式土器が、他の道東地域より多く出土する場所です。今回の展示では、釧路市幣舞遺跡から出土した亀ヶ岡式土器を約320㎞離れた北斗市郷土資料館に持ち込みました。前年度に負けず劣らずの強行軍ではありましたが、ちょっとした土器の里帰りにも貢献でき、道南の方々にも釧路の縄文を知っていただく貴重な機会を得ることができました。

＊釧路市立博物館

北斗市郷土資料館　展示会場

「縄文」の面白さ

同年11月、釧路市立博物館ではサテライト展「ひとつぼミュージアム」を開催いたしました。釧路は、約5～6,000年前の暖かい海と約2,000年前の寒い海の頃につくられた貝塚（暖：東釧路貝塚　寒：幣舞遺跡）が両方みつかっている「貝塚のまち」です。展示会場のひとつである和商市場では、釧路の縄文人たちの食事事情と今も昔も美味しい釧路の海の幸について紹介しました。

近年、考古の分野では、過去の調査で出土した資料をどのように活用するかが課題となっています。考古好きにとっては、並べられた土器や石器を眺めるだけで垂涎ものではあるのですが、「大昔のヒトは何を食べて、どんな暮らしをしていたのか？」や「縄文土器をつくった人は果たして右利きか、左利きか？」といった、資料を通してその向こう側にいるヒトやその思いについて想像することができるのも、「縄文」が持つ良さのひとつだと考えています。

中々答えが出せないものも多い縄文談議ではありますが、考古資料を通して、確かに居たであろう釧路の縄文人と向き合ってみるのも、面白いのではないでしょうか。

和商市場に展示した大昔の海の幸